マニラにたつ独裁政権の巨大建築

@Manila

昨年の秋、マニラを訪れた。どんなエリアでも必ず訪れる場所のひとつが国立博物館である。

そこで感心したのは、現代までのフィリピンの建築の歴史を一覧できる部屋が存在していたこと。決して大きな空間ではなかったが、最低限必要な図面や写真のパネル、あるいは模型も設置しており、ざっと建築史の流れを一通りたどれる展示の構成だった。フィリピンの建築旅行は、ここから始めるとよいだろう。

だが、日本では、20世紀の軌跡も含む建築博物館がいまだに存在しない。上野の国立博物館にも、建築史の常設展示がない。つまり、外国から日本の建築に興味をもった人が来ても、最初に案内すべき場所がないのだ。フィリピンにあって、なぜ日本でつくれないのかと疑問に思う。

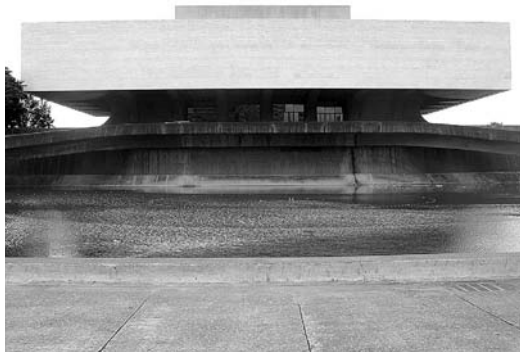
フィリピンは、イスラム、スペイン、アメリカ、日本の影響と支配による重層的な文化を育み、それが建築や都市にもあらわれている。だが、マニラ湾に面するパサイ市の埋立地には、文化センターや国際会議場など、やや趣が違うモニュメンタルな建築群が並ぶ。

これらはマルコス元大統領の悪名高いイメルダ夫人の肝煎りによってつくられた。評論家のディヤン・スジックによれば、彼女は靴への情熱と同じくらい熱心にランドマークとなる建築を収集した。

しかも、そのほとんどのプロジェクトを一人のフィリピン人建築家、レアンドロ・V・ロクシンに依頼している。アメリカでエーロ・サーリネンとポール・ルドルフに師事し、モニュメンタルなデザインを学んだ人物だ。彼は、国家の芸術家として、前述した二つの施設のほか、近接する民俗芸術劇場、国立芸術センター、国際貿易展示センター、プラザホテル、そして大阪万博のフィリピン館も手がけている。

特筆すべきは、ヒトラーやムッソリーニも好んだ新古典主義の風味を加えた現代建築の文化センター（1969年）である。装飾のない無表情な直方体の巨大なヴォリュームが宙に浮かび、両サイドから池を抱きかかえるようにダイナミックな弧を描くスロープが続く。つまり、建物正面の広場となるべきところは、水面が広がっているだけで、すぐに後が道路となっており、民衆の集まる場所がない。独裁政権の建築ならではだろう。通常、こうした空間構成の公共施設であれば、手前に広場を設けるはずだ。

すでにマルコスの政権は過去のものになったが、現在でも巨大建築のまわりは人影がなく、空っぽである。



フィリピン文化センター（国立劇場、マニラ首都圏パサイ市）

写真提供：筆者

をちこち散歩

五十嵐太郎（いがらし たろう）

建築史家、東北大学准教授